第２回　学校運営協議会　記録

日時	令和８年６月９日（火）17:00～	会場	美香保中学校　２階多目的室
司会	髙橋（美香保中学校 教頭）	記録	澤本（美香保中学校 主幹教諭）
出席者	山本、真鍋、橋本、森野、渡部、藤原、壽原、菊地、佐藤、北、小山、守本、水口、加藤、澁谷、齋藤、杉本、守屋		
欠席者	桑山		

【１】会長挨拶（藤原委員）

【２】議事

［議案１］副会長の選出

・　加藤委員に決定

【３】札幌らしいコミュニティ・スクールについて（守本委員）

1.　コミュニティ・スクール（CS）の目的と役割

・　**目指す子ども像の共有：**学校、保護者、地域の大人たちが「目指す子ども像」を共有し、一体となって地域の子どもたちを育てていくことを目的としています。

・　**小中一貫教育との密接な連動：**札幌市の CS は小中一貫教育の基盤と深く連動しています。これを乗り物に例えると、小中一貫教育が「ハンドル（方向性を決めるもの）」、学校のグランドデザインが「カーナビ（目的地＝目指す子ども像）」、そして学校と地域が「連動する両輪（推進力）」となり、共に前進する仕組みです。地域が推進力を担うことで、学校や教員の負担感を和らげる役割も持っています。

2.　札幌市ならではの特徴と協議会の権限

・　**「子ども中心」の運営：**他の自治体と異なる札幌市独自の大きな特徴として、学校運営に「子どもの声を反映させること」を重視している点が挙げられます。

・　**学校運営協議会が持つ３つの権限：**委員は教育委員会から任命され、主に以下の３つの権限を持っています。

　①　学校運営の基本方針を承認する権限

　②　学校運営について教育委員会や校長に意見を述べる権限

　③　教職員の任用に関して意見を述べる権限（※個人の人事権ではなく、必要な人員配置の要望や、働き方改革に関する意見などを指す）

3.　札幌市内における導入状況と今後の展望

・　**後発からの急ピッチな導入：**札幌市は令和５年時点では導入率０%でしたが、教育委員会の主導により急速に導入が拡大しています。令和７年度時点のデータでは約 34.1%に達しています。

・　**100%全校導入への計画：**今後、令和８年度には約 74%まで拡大し、令和９～10 年度には市内の全学校への導入（100%）が完了する見込みで計画が進められています。

・　**地域特性の活用：**事例として挙げられた美香保中学校区のように、周辺に多くの大学や支援学校、歴史的資源などの「地域のお宝（教材）」が豊富に存在するエリアもあり、こうした地域の特色を活かした CS の活性化が期待されています。

【４】令和７年度に実施した防災の取組について（水口委員）

・ 北光小学校の防災教育について説明。
・ 地震リスクの高い地域に位置し、校内探検や応急手当、行政からの防災要請などを授業に取り入れる。防災教育はゲーム感覚で、災害のダメージ分析、対策、備蓄、訓練、地域連携などを学ぶ。
・ 子どもたちが学校や地域の防災対策について調査し、発表するフォーラムを準備している。校内の防災設備や避難所としての役割、町内会やまちづくりセンターの防災備蓄などを調査し、地域の人々と協力して授業を組み立てている。また、消防団や消防署の協力も得て、応急手当や消防署の仕組みを学ぶ機会も設けている。
・ 地域防災において、大人世代が地域と関わる意識が薄れている。助ける側も助けることができることを認識し、助け合い、繋がりを築くことが地域の持続可能性に不可欠である。子どもたちにも、大人から守られる安心感と、自分も役に立てる存在であるという自覚を持ってもらうことが重要である。

【５】熟議

「いじめ、不登校、非行、SNS トラブル等の現状と指導の在り方」と「他者の弱さや挑戦を認める態度の育成」について

〈Ａグループ〉

討議では、不登校や生徒との関わりにおける課題、およびその背景にある社会的要因について、総合的な話し合いが行われました。

1. 現状とサポーター活動報告

・ **登校支援の事例：** 小学校の「学びのサポーター」が、登校に不安を抱える児童を学校まで送り届けることで、児童が学校生活を楽しめている具体的な地域サポートの事例が共有されました。
・ **関わりの難しさ：** 中学校のサポーターからも、現場での生徒とのコミュニケーションや関わり方に難しさを感じる現状が挙げられました。

2. 生徒が抱える課題とその背景

生徒たちが抱える対人関係の難しさや無気力感の要因として、以下の２点が指摘されました。

・ **コロナ禍による「関わり」の空白：** 現在の中学１年生のように、小学校入学期にコロナ禍が重なった世代は、他者と関わる土台を築く経験が不足しています。これにより、無気力になったり、人と関わることで過度に疲弊したりする傾向が見られます。
・ **学校以外の「揉まれる場」の減少：** 昔に比べて学校外で多様な人と関わる機会が減り、子どもが集団の中で揉まれる場が学校しかなくなっています。そのため、自分と異なる意見を持つ人と関わる経験が少なく、異質な意見に直面すると身を引いてしまい、同質なコミュニティに固まりやすくなっています。

3. 今後に向けた提案

・ **ハードルの低い経験の提供：** 子どもたちの経験不足を解消するため、学校の勉強のように段階的な「積み重ね」を必要としなくても良い場（例：地域のお祭りの手伝いなど）で、多様な人と関わる機会を作ることが提案されました。
・ **地域社会によるアプローチ：** 学校や家庭だけでなく、地域全体で子どもたちが多様な人と関わる経験を増やしていく環境づくりが重要であると結ばれました。

〈Ｂグループ〉

いじめや不登校、SNS トラブルなどの諸課題は相互に深くつながっているという視点から、未然防止のためのアプローチや地域・家庭との関わりについて包括的な議論が行われました。

1. 現状の推移と指導の難しさ

- **トラブルの質の変化：** 以前に比べて非行は減少している一方、現在は不登校や SNS トラブルが増加傾向にあることが共有されました。
- **年代による関心の乖離：** 小中一貫教育の枠組みであっても、学年や年代によって子どもたちの関心事が異なるため、共通した指導や対策を行うことの難しさが指摘されました。

2. 未然防止に向けた「土壌づくり」

- **永遠のテーマとしての対応：** いじめなどの課題を完全に「ゼロ」にすることは極めて難しいという共通認識が示されました。
- **マインドと他者意識の育成：** 課題を未然に防ぐためには、単なるルールによる縛りではなく、「いじめることは良くない」というマインドを育てること、そして相手を大切にする「他者意識」を育むための集団的な土壌（環境）づくりが重要であると語られました。

3. 家庭へのアプローチと地域での関わりにおける課題

- **家庭（保護者）が抱える背景：** 子どもの問題行動の背景には家庭環境や保護者自身が課題を抱えているケースも多く、子ども単体への指導だけでなく、保護者にどう向き合うかという根本的な難しさが挙げられました。
- **大人と子どもの信頼関係：** 地域の指導者（サッカークラブでの事例など）が子どもの「良き相談相手」になれるよう努めていても、適切な距離感を保ち、一朝一夕にはいかない信頼関係を築くことの難しさが現場の実感として報告されました。

〈Ｃグループ〉

いじめや SNS トラブルなどの「現状」と、他者を認める「態度の育成」は表裏一体であるという視点から、子どもたちの心理的背景や地域が果たすべき役割について話し合われました。

1. 現状の課題と心理的背景

- **SNS トラブルの要因：** 相手の顔が見えない文字主体のコミュニケーションによる誤解や、人間関係の希薄さ、子どもたちの自己肯定感の低さがトラブルの根底にあるのではないかと指摘されました。
- **失敗を恐れるプレッシャー：** 他者の弱さや挑戦を認められない背景として、子どもたち自身が学校や家庭で「失敗してはいけない」という強いプレッシャーを感じ、過度に失敗を恐れている現状が挙げられました。

2. 態度育成に向けたアプローチ

- **自己受容の重要性：** 他者の弱さを受け入れるためには、まず子ども自身が自分の弱さを認められ、安心して自己開示できる環境が必要であるという点が強調されました。

【６】連絡（髙橋教頭）

【５】終わりに（真鍋委員）